

氏名(国籍)	高 慧 禎 (韓国)		
学位の種類	博士(言語学)		
学位記番号	博甲第3865号		
学位授与年月日	平成17年12月31日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
審査研究科	人文社会科学研究科		
学位論文題目	韓国語のアクセントに関する実験音声学的研究 -音声学的アクセントの実体を探る-		
主査	筑波大学教授	博士(学術)	城生 伯太郎
副査	筑波大学助教授	Ph. D. (言語学)	池田 潤
副査	筑波大学講師	博士(文学)	白山 利信
副査	筑波大学教授	博士(文学)	湯沢 質幸
副査	東京大学大学院助教授		福井 玲

論文の内容の要旨

本論文は、韓国語のアクセントを実験音声学的方法を用いて音声学的観点から解析した結果、音響面の実験では音種による microprosodic なディストーションの実態を明らかにし、また、大脳における聴覚情報処理系を視野に入れた聴覚面での実験では、従来のいかなる分類とも異なる、アクセントに関する新たな類型化を行なった研究である。

韓国における従来のアクセント研究が、音韻論的にいわゆる非示差的特徴を有するためにさほど活発に行なわれてこなかった点から見て、本研究から得られたアクセントのレベルにおける音声学的特徴の指摘は、稀少である。

本論文の構成は、以下のとおりである。

- 第1章 序論
- 第2章 先行研究
- 第3章 韓国語のアクセントに関する音響音声学的研究
-子音とアクセントとの相関性-
- 第4章 韓国語のアクセントに関する電気生理学的研究
- 第5章 結論

第1章では、1.1. 韓国における音声研究の方法、1.2. 本研究における「アクセント」の範囲、1.3. 本研究の目的および意義、によって研究対象となる現象を示した上で先行研究の現状について述べ、最後に本研究の着眼点と概要を示した。

第2章では、韓国語のアクセントを扱った先行研究を、音声学および音韻論の両面から概観したうえで、従来の研究におけるアクセントの捉え方や方法論の問題点を指摘した。

第3章では、音響音声学的観点から2音節語までの規模で、特に子音の音種による違いがアクセントにおよぼす影響について、Di Cristo et. al. (1976) 以来の主張である microprosody の側面から綿密な実験観察を

行なった。その結果、

①韓国語における基本的なアクセントパターンは、下降音調である。

②それにもかかわらず、2音節語の頭子音に濃音が立つと上昇音調に変調する。

という、新たな見通しを得た。

一方、音韻論的に示差的である日本語では、予想通りに、子音の音種によっていわゆるアクセントの型が microprosodic な影響を受けることはなかった。

第4章は、本論文の中核をなす部分であり、事象関連電位(ERP)を用いた電気生理学的方法による脳波実験が展開されている。著者は、実験を大きく2種類に分け、まず第1実験では基礎実験として、ピッチ変動が比較的明瞭である中国語の声調を刺激音とした場合、日・韓両言語母語話者が、それぞれの声調に対してどのようなERPの反応を示すかを探った。この結果、

①ERP波形におけるN1とP2成分に着目することによって、総じて日本語母語話者のほうが、韓国語母語話者よりもアクセントの処理時間が短縮される傾向にある。

②声調別にN1ピーク潜時に注目すると、下降調(第4声)の処理時間が最もはやい。また、この傾向は日・韓両言語母語話者ともに一貫している。

という点が明らかにされた。

また、後の第2実験が、いわゆる音韻論的なレベルに参与しているのに対し、この第1実験の内容がもっぱら音声学的レベルに特化した反応である点に注目して、従来医学、心理学などの領野では「長潜時成分」として一括されてきたERP波形におけるN1とP2成分を、新に実験音声学の領野では「準長潜時成分」と呼んで、後述するP300やN400などの「長潜時成分」とは分けるべきであることを主張した。

次に、本論文の最終目的である第2実験では、日本語の頭高型(下降音調)と尾高型(上昇音調)を刺激音として、日・韓両言語母語話者のERP波形における反応を比較検討した。この結果、

①P300成分では、日本語母語話者と韓国語慶尚道母語話者が、ともに上昇音調よりも下降音調のほうで処理時間がはやい。一方、韓国語ソウル方言母語話者においては、逆に下降音調よりも上昇音調のほうで処理時間がはやい。

②N400成分では、日本語母語話者だけが上昇音調よりも下降音調のほうで処理時間がはやい。一方、韓国語母語話者は慶尚道方言であれ、ソウル方言であれ一様に下降音調よりも上昇音調のほうで処理時間がはやい。

という点が明らかにされた。

すなわち、このことは、従来の音響音声学的研究ならびに音韻論的研究によって得られた(a):日本語および韓国語・慶尚道方言、(b):韓国語・ソウル方言、という2類型とは異なる、(a):日本語、(b):韓国語・慶尚道方言、(c):韓国語・ソウル方言、という3類型を立てることの正当性を、新に脳波実験による認知的側面を視野に入れた実験音声学的研究によって主張したことになる。

第5章では、各章で論じたことの総括を行なうとともに、今後の課題が示されている。

審査の結果の要旨

韓国語におけるソウル方言タイプのアクセント研究は、音韻論的に非示差的であるが故に研究が進展しておらず、ここから、従来ソウル方言タイプの韓国語におけるプロソディー研究は、勢いイントネーションに傾いていた。

このような現状にあって、著者は音韻論とは異なる接近法である実験音声学によって、この言語にも単語レベルのアクセント現象は重要であり、そこに固有の音声学的特徴が見いだされることを客観的に指摘した

功績は大きい。

音響音声学的方法では、従来多くの研究者が重視しなかった microprosodic features に着目することによって新にソウル方言タイプの韓国語のアクセントには、基本音調として下降音調が現象として実在することを明らかにした。

事象関連電位（ERP）を用いた電気生理学的方法による脳波実験では、① ERP 波形の諸成分のうち比較的早期に現れる N1 や P2 成分までがもっぱら音声学のレベルの内容に特化した反応であるのに対し、その後に出現する P300 や N400 などの成分がいわゆる音韻論的レベルにも対応した反応であることを見だし、前者を「準長潜時成分」と命名した。② P300 および N400 に注目した結果、日本語のアクセントに対する日・韓両母語話者の聴覚情報処理系に見られる反応の違いを見いだした。

従来は、音声学にせよ音韻論にせよ、日本語（共通語）と韓国語慶尚道方言を一緒にし、これと韓国語ソウル方言を対比するという類型化が一般的であった。しかるに、著者による脳波実験結果から、少なくとも認知のレベルにおいては、日本語（共通語）・韓国語慶尚道方言・韓国語ソウル方言の三者には、三様に異なる音声学的特徴を有することが見いだされた。このことは、今後の斯学におけるアクセント研究にとっては重要な指摘となるにちがいない。

なお、今後の課題としては、伝統的な実験音声学的方法による宿命としての一般化の問題をはじめとして、本論文の主張における信憑性を高めるためにもより多くのデータ件数をこなし、さらには音韻論との擦り合わせにも配慮するなど、積み残された問題は山積している。しかし、これらは本論文の成果を踏まえて研究を推進することによって将来解決されるはずの問題であり、学位論文としての価値をおとしめるものではない。

よって、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。